

いろんな面からふれる”よどがわ”

今年、平成21年は奇しくも淀川改良工事100年の記念の年であり水都大阪2009が開かれている。

そこで我が母なる大河淀川をとり上げてみたい。

ビワ湖に端を発して大阪湾に注ぐ全長75キロ、水位の高低差30m、流れは舟道に適し交通の動脈として言ふ迄もなく、大阪平野、市の中心を流れている堂々たる大河である。

三川を合流してその水系は度々の洪水や氾濫、堤防の決壊・付替、水路の開削などの変遷を辿り、そこに暮す人々に大きな影響を与えてきた。

国の歴史にも古くは継体天皇の頃の交通として、更に時代は下り、江戸～明治の初めにかけて都とのかかわり、更に商都「なにわ」に至る歩みである。

(朝鮮通信使とか・・・この一連の資料・記述は尼信の資料館、湖北の雨森芳洲庵等にくわしい)



■三十石船
(資料:財団法人 アダチ伝統木版画技術保存財団)

三栖閘門

先年長山講師について淀川を学んだ時、他のことはすっかり忘れてしまったが、今でも鮮明に残っているのは、初めて現地に行って知った三栖閘門の跡とその資料館である。



■三栖閘門 完成当時(写真:淀川資料館)

三川合流の少し上手、水位差のある宇治川と濠川を結ぶ堰で、昭和初期建設、都が京に移って以来、経済・軍事の面から伏見は脚光を浴び、秀吉時代に築城等々建築資材などの資材の運搬に必要から、伏見港はその拠点となり、京の玄関口として益々重要になったといふ。その為”三栖閘門”は衆知の技術を尽くして着工され3年がかりで完工、淀川海運のスエズと呼ばれたそうである。近代は蒸気船も就航したといふ。しかし鉄道などの陸路交通の発展、天ヶ瀬ダム completionにより三栖閘門はその役割を終えた。

今は十石舟の舟着場、資料館等も出来、往時を偲んでいる。時の流れは川の流れに重なり、その盛衰はこの世にある運命共同体としてしみじみと感じたことであった。

三栖閘門
1929年(昭和4)3月31日に完成



■三栖閘門前扉室
(写真:淀川河川事務所)

”よどがわ”かかわりある人物

大橋房太郎 (1860年－1935年)

大阪府出身の政治家。

大阪府を流れる淀川の治水に一生を捧げ、治水翁と呼ばれた。

【略歴】

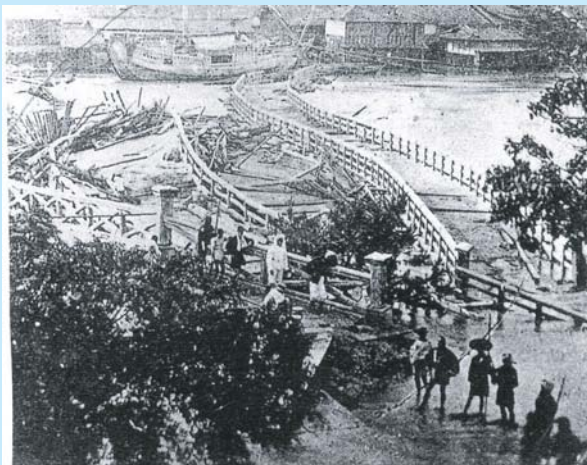
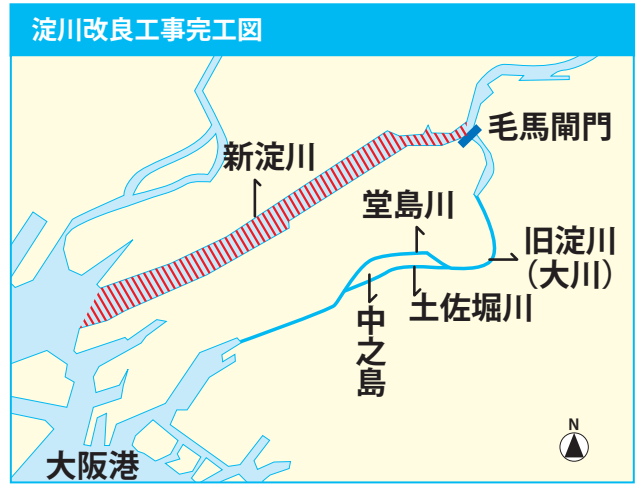
- 大阪府東成郡榎本村(現在の大阪市鶴見区)放出(はなてん)の庄屋に生まれた。
- 東京で鳩山和夫邸の書生をしていた時、1885年(明治18年)の淀川の大洪水のことを知った。
- 急遽帰阪し、惨禍を眼のあたりにして、淀川治水の大事業に取り組むことを決意する。
- 1891年(明治24年)、大阪府議会議員に当選する。その後、房太郎らの努力が実り、1896年(明治29年)、国レベルでの河川法が制定され、淀川改修費が出されるとの両院の可決をみた。その時傍聴席にいた房太郎は思わず「万歳！」と大声をあげた為、守衛に場外に連れ出されるという場面もあった。
- 淀川治水のため私財をなげうち、生涯清貧を貫いた井戸堀の政治家で、晩年にも陋屋に住んでいた。
- 葬儀は大阪市葬で大阪中央公会堂で行われた。(ウィキペディアより引用)



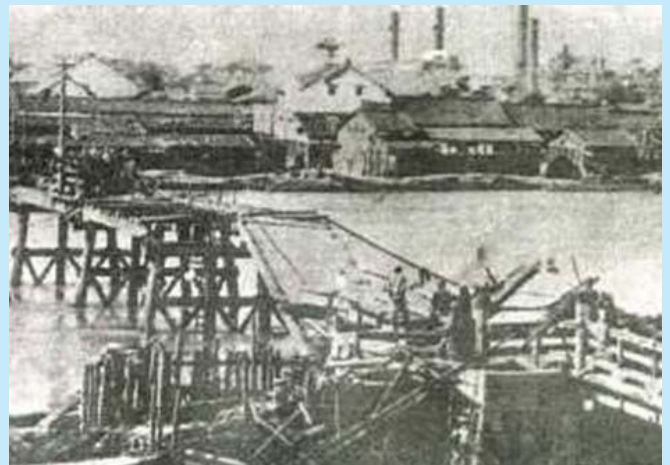
■大橋房太郎

【治水事業の概要】

土地買収	約916ヘクタール(甲子園球場の約215個分)
地権地主	約3000人
工事期間	明治29年～明治43年(明治43年完工)
総工費	約1000万円 (国家予算2億円の5% 現在のお金で2兆円)
労働力	延べ800万人



■淀川決壊 安治川橋(写真:淀川河川事務所)



■淀川決壊 天満橋(写真:淀川河川事務所)